
時を刻む木

JOHNEY

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時を刻む木

【著者名】

JOHNEY

【あらすじ】

あの子は天使で、この子は幽霊。彼女たちは、自分たちの頼みごとをきいてくれる人を探してます。ある日突然、裸の木に青々とした葉が一瞬で現れたら、それは「時を刻む木」。全ての葉が地に落ちたとき、それはやつてくるのです。

第一話 不思議な一人

僕は普段から理屈で物事を考えるほうだし、理化学的なことを信じている。

でも、彼女との出会いに関しては、どんな理屈を並べても「奇跡」という言葉にしか辿り着かない。

彼女もきっと、そう思っていただろう。

僕が彼女と出会ったのは、冬色に染まつた自宅近くの公園だった。

日曜日の夕方、僕は犬を散歩に連れていくため、近所の公園を訪れていた。

公園のベンチに、白いワンピースを着た華奢な女の子と、ジーパン・Tシャツ姿の僕と同い年くらいの女の子が腰掛けているのを見かけた。

しかし突然、僕が連れていた犬が一人に向かつて吠え始めたので、

「すいません・・・」

と、僕が一人に軽く頭を下げて言つと、二人はなぜか物凄く驚いた様子になり、僕のほうへと駆け寄つてきた。

そして、

「私たちが見えるのですか！？」

ワンピースの女の子が僕の顔を覗き込むようにして言つた。

その瞳は輝いて見える。

しかし僕は、その娘の言葉の意図が今いち理解できず、

「はい・・・、見えますけど・・・。」

と、不審な表情でその言葉に答えた。

すると、その僕の言葉を聞いた一人は、手を取り合つて喜び始めた。

「私たちの話を、聞いてはもらえないでしようか！？」

ワンピースの女の子が、懇願するような眼差しで僕に言った。

しかし、明らかに怪しげなその一人の話など聞く氣にもなれず、

「今、忙しいんで・・・。」

と、無愛想に応えて、僕はその場を小走りで離れていった。

一人は、僕を呼び止める事ではなく、ただ寂しげな瞳で僕を見送っていたようだつた。

翌日の朝、僕は学校に向かうため、朝ラッシュの満員電車の中にいた。

今年で高校生活も三年目。

いい加減、この窮屈な状況にも慣れてきていた。

毎朝同じ時間の、同じ車両の、同じドアから乗り込むせいか、いつしか不思議と周囲の他人は、顔見知りのような存在となつていた。

ふと無意識に目を向けた先に、見覚えのある女の子がいた。

その娘は、この超満員の電車の中でも特に苦しんでいる様子はない。よく見てみると、その娘は昨日、公園で会つたTシャツ・ジーパンの女の子だった。

しかも、昨日と同じ服装に見えるのは気のせいか・・・？

僕が降りる駅で、彼女も降り、僕と同じ方向に歩き出した。

僕と同年代に見えるが、この間に制服を着ていないところを見る
と、定時制の学生か、もしくはサボりか・・・、そんなことを考え
ながら彼女の後ろを歩いていた。

しばらく行くと、僕は彼女の足取りに追いついてきた。

試しに声を掛けてみようと思い、

「サボりか？」

と彼女の肩を叩いた。

しかし、

「は？」

僕の声に振り返ったのは、クラスメイトの男子生徒だった。

僕は状況が飲み込めず、目を丸くした。

「信次、まだ夢の中か？」

僕のクラスメイトが、笑いをこらえた様子で僕に言った。

「透？あれ？今、ここに女の子いなかつたか？」

「はあ？お前、いくら彼女いなくて寂しいからって、幻想はマズイだろ？！」

クラスメイトの透が、僕の言葉に大爆笑し始めた。

しかし、確かに昨日公園で会った女の子がそこにいたはずなのに、一体この一瞬で何がどうなったのか、さっぱり分からず、僕はただ困惑していた。

授業と授業の合間の休み時間に、次の授業を行う教室へと移動して、いた僕は、学校の廊下で女の子とぶつかった。

「あー」めんなさい！

ぶつかった女の子が、とつせに言つた。

「いや、じつじつや。」

明らかに僕が余所見していた。

その女の子は、僕とぶつかった拍子に抱えていた教科書を落としてしまった。

僕は、それらを素早く拾い上げて、女の子に渡そうとした。

最後の一冊を取り上げようと手を伸ばすと、それが無数の小さなプリクラと何枚かの写真が貼られた手帳であることに気が付いた。

落とした時に無造作に開いてしまったページには、大きな写真が一枚貼られていた。

そこには、今日の前にいる女の子と、もう一人女の子が仲良さそうに寄り添って映っている。

そのもう一人のほうの女の子を見て、僕はなぜか胸騒ぎがした。

それが、昨日公園で会ったTシャツ・ジーパンの女の子だったからだ。

拾い上げた手帳を、しばらく凝視していた僕に、女の子が明らかに嫌そうな表情で、

「あのお・・・、それ、返してください・・・。」

と、低い声で言った。

僕は、「ごめん」と一言謝つて、手帳を女の子に手渡した。

そのやりとりをクラスメイトの透が見ていたようで、女の子がそそ

くさと僕のもとを離れた後に、すかさず僕のもとへと駆け寄ってきた。

「あの子、タイプなのか？」

「バカー！ちげえよ！」

「いいじゃねえか！なんなら、俺があの子紹介してやつてもいいぜ。」

「

透が、得意げな表情で僕の腕を肘で突付いた。

「知り合いなのか？」

「その僕の質問に、

「つていうか、先月あの子に告られたから。」

悪びれる様子を微塵もみせずに透は答えた。

忘れていたが、この透は入学した時から異様にモテていた。

あまり他人を悪く言いたくはないが、だいぶ遊んでいるようすで、最低一股、最高五股かけていたとか、いないとか。

けして悪い奴ではないのだが、手癖が悪い。

「せうこのよせよ。いつか恨みをかつから。」

その僕の言葉を、透は笑つてやり過ごした。

その日の学校の帰り道、僕はたまたま例の自宅近くの公園の前を通りた。

すると、ワンピースの女の子とTシャツ・ジーパンの女の子がベンチの所にいた。

僕は、おもむろにその二人のもとへと歩み寄つて行つた。

僕に気が付いたワンピースの女の子が、軽く会釈したので、僕もそれに応えた。

そして、

「今朝、学校の近くで会つたよね？」

僕はTシャツ・ジーパンの女の子に言った。

しかし、返答が返つてこない。

表情をしかめた僕にワンピースの女の子が、

「彼女、しゃべれないんです。」

慌ててフォローするように僕に言った。

一瞬、沈黙が生まれ、気まずくなつた僕は、その場を離れようとした。

すると、

「あの、・・・私たちの話を聞いてはもらえないでしょ？・・・

ワンピースの女の子が、昨日より深刻そうな表情で、僕に言った。

おそらく、話を聞いてくれる人が現れるまで、こうしてこの公園のベンチにい続けるのだろうと思い、僕は聞くだけきてみようという軽い気持ちで、彼女の言葉に頷いた。

「ありがとうございます！」

女の子一人は、深々と僕に頭を下げた。

聞くだけ聞いてみた話は、実に現実離れしたファンタジー超大作だった。

まず、ワンピースの女の子が初めに口にした言葉が、

「私は、天国から命を受けて降りてきた天使です。」

だつたもんだから、僕は思わず聞き返した。

しかし、聞き返しても返ってきた言葉に変化はなかつた。

白いワンピースの女の子は、天使なんだそうだ。

そして、Tシャツ・ジーパンの女の子はといつと。

「彼女は、先月末にお亡くなりになつた木村里歌さんです。」

幽靈。

つまりお化け。

僕は、この二人にからかわれているのではないだろうかと、遅くも気が付いた。

しかし、

「冗談などではありません！信じてくださいー。」

ワンピースの女の子は、必死な形相で僕に訴え掛けってきた。

もし冗談で僕をからかっているなら、大した役者だ。

でも、百歩譲つてこの一人が天使とお化けだと認めたとして、なぜこんなにくつきりはつきり存在しているのかが、疑問だ。

その問い合わせは、

「それは、あなたがただ単に靈感が強いだけだと思います。現に、この公園のベンチにいる私たち一人に気が付いたのは、あなただけでしたから。」

万遍の笑みでサラッとワンピースの女の子は言つてのけた。

これも追求したかったが、僕が靈感体质だということをとりあえず認めたとして、一体一人は公園で何をしてたのか？

話を聞いてもらつて、それからどうしようつとこつのか？

それが一番の疑問だつた。

「ここからは、話を聞いてもらつといつよつは、お願ひになつてしまふかもせんが・・・。

実は、天国にめされる人には、たつた一つだけ願いを叶えてもらえる特権があります。

生き返るという願いは当然叶えられませんが、こつして下界に魂だ

け舞い戻り、何かやり残したことをやり遂げたいという願いは叶えられるのです。

だから、里歌さんはこうして下界へと舞い戻つてきました。
魂なので、下界の人たちとお話しさることができません。
だから、私がこうして付き添つてしているのです。」

そんなお伽話のようなことを、ペラペラと真剣な表情でワンピースの女の子は語り続けた。

「里歌さんの願いは、『生前付き合っていた彼にお礼を言いたい』といふものです。

里歌さんの彼がどの方なのかは分かったのですが、不運にもその彼には靈感の力ケラもないせいか、私ではアプローチすることができず、困っていました。

そこへ、あなたが現れたといふわけです。」

「といふわけです。」と言われても、「はい。そうですか。」と素直に受け入れることのできない話だった。

つまり、

「里歌さんの代わりに、その彼に里歌さんへの気持ちと、里歌さんからの言葉を伝えて頂きたいのです!どうか、この願いを受け入れては頂けませんでしょうか!?」

といふわけだ。

僕は、はつきりとお断りした。

しかし、

「どうか…どうか…！」

そのワンピースの女の子は、見た目には似合わない粘り強さを發揮して、僕に押し迫ってきた。

僕は、何だか無性に恐ろしくなったのか、それとも菩薩のような気持ちが芽生えたのかは不明だが、

「わ、分かったよ…。やればいいんだろう…。」

と、軽く承諾してしまったのだった。

「ありがとうございます！本当に、ありがとうございます！」

ワンピースの女の子は、僕に何度も何度も頭を下げた。

「それでは、早速これからのことをご説明させて頂きます。」

そう言って、ワンピースの女の子は、指をパチンと鳴らした。

すると、公園の真ん中に堂々と立っていた大きな木に、冬には似合わない青々とした葉が一瞬にして現れた。

僕は、目が点になった。たまたまそこに居合わせた他の人たちも、驚きの悲鳴を上げた。

もしかしたら、ここにいるワンピースの女の子は、本当に天使なのかもしれない、僕は彼女たちを信じ始めていた。

「あちらの木の葉が全て落ちるまでが、里歌さんに『えられた時間です。それは今からおよそ1週間。

その間に願いを叶え、この下界での最後の時間を堪能して頂く」とができるというわけです。お分かりいただけましたでしょうか?」

僕は、まだ驚きの余韻に浸っていたため、至極素直に頷いた。

その僕を見て、ワンピースの女の子は微笑むと、再び指をパチンと鳴らした。

すると、周囲の様子にはこれといった変化は現れなかつた。

失敗か?僕は、心の中で叫んだ。

「それでは、里歌さんをよろしくお願い致します。木が全ての時間を刻んだ時、再び迎えに参ります。」

そう言って、ワンピースの女の子はスーっと綺麗に姿を消した。

第一話 不思議な一人（後書き）

まだ、一作品を完結させていませんが、この作品はわりと短い連載で終わるような気がするので、投稿させて頂きました。THE ENDと仰わせて、どうぞ今後ともよろしくお願い致します。

第一話 火曜日

自分の部屋にいるのに、どうしても落ち着くことができない理由があつた。

それは、

「何で、キミはここにいるの？」

先月末にお亡くなりになつた木村里歌さんが、僕の部屋にいるからだつた。

「まあ、どうせしゃべれないんだから、訊いても仕方ないだらうけど・・・。」

僕は、ベッドに入つて、布団の中にくるまつた。

すると、

「しゃべれるよ。」

女の子の声が聞こえた。

僕の「彼女いなくて寂しい病」は末期のようだ。

「ねえ、聞いてる？」

僕の布団を誰かが引つペがした。

驚いた。

今聞こえた声の主は、木村里歌だつたのだ。

「しゃ、しゃべれないんじやなかつたつけ・・・？」

僕の明らかに動搖ぶりに、木村里歌はクスクスと笑い出した。

しかも、魂でしかないはずの彼女が、僕の布団を引っぺがしたのは、一体なぜ？僕は、だいぶ混乱していた。

「さつき、公園で天使さんが指を鳴らしたでしょう？最初の一回は木に対して。次の二回目は、私に対して鳴らしたの。」

それでも、僕の頭の上にはクエスチョンマークが複数躍っていた。

「だつて、私がしゃべれなかつたら、困るでしょ？」

僕は、ただ頷いた。

「じゃあ、いいじゃない。細かいことは。

木村里歌は、笑うと可愛かつた。

僕は、再びただ頷いた。

「昨夜、僕は彼女に訊いてみた。

「何で、彼氏に気持ちを訊きたいの？付き合ってたんだから、聞くまでもないんじゃないの？」

その僕の質問に、

「でも、分からなかつたの。彼のことが……だから、聞きたいの。本当の気持ちを。」

微笑みと、微かな哀しみを合わせた表情で彼女は答えた。

僕には、その言葉の意味がいまいち理解できなかつた。

「恋愛」って、難しいんだ。

ただ、そう感じた。

今日は火曜日。

公園の木の葉は、まだまだたくさん残っている。

昨日のミラクルは早くも噂として広まつたらしく、朝から不思議な木を見に来る野次馬がチラホラ見えた。

「ところで、彼氏に伝えたいことって、何なの？」

僕は、自宅の最寄駅で電車が来るのを待ちながら、横にいる彼女に尋ねた。

「素敵な時間をありがとうございました。けして忘れません。」

なぜか、僕は胸が熱くなつた。

「どうしたの？ちゃんと、伝えてよねー。」

「分かってるよー。」素敵な時間をありがとうございました。けして忘れません。」「でしょー！？」

それは、周囲の人たちから見れば、僕の不気味な独り言だった。

いつも通りの時間に、電車がホームに入ってきた。

そして、電車はいつも通りの満員、ぶりだつた。

学校の近くの駅に着き、僕は人を押しのけてよつやく下車した。

「懐かしいなあ。私も毎朝このギュウギュウな電車に乗ってたつけ。
‥。」

彼女が、電車を振り返りながらポツリと言つた。

しかも微かな笑みを浮かべた表情で。

しかし、彼女にとつては懐かしの満員電車でも、僕にとつては迷惑な満員電車でしかなかつた。

とても、微笑を向けられるような存在ではない。

「じゃあ、もしかしたら生前、知らないうちに出てたかもしないね。」

その僕の何気ない言葉に彼女は、

「え？ うん。」

まるで不意をつかれたかのような表情で、それに応えた。

駅から学校までの道中、僕は透を見つける。

「あ。透だ。」

と、僕が透の方へ駆け寄ろうとするとき、彼女が思いがけないことを言つ。

「透君。」

しかも、その表情はどこか柔らかな様子で、先ほどまでは別人のようだ。

「え？」

僕が聞き返すと、

「透君なんだ。私が付き合つてた人。」

彼女は、満遍の笑みを浮かべて、僕の顔を見た。

「そ、そうなの・・・？」

僕は、無意味に動搖してその場に立ち止まつた。

「うん。実はね・・・、信次君のことも知つてたの。透君と仲良いでしょ?」

彼女の思いがけない言葉に、僕はせらりと動搖してしまつた。

透とは確かに親しくしているが、彼女のことは知らなかつた。

「じゃ、じゃあ、透と話せば良いんだ・・・?」

その、僕のぎこちない笑顔での問いに、彼女はゆっくりと頷いた。

僕は息を呑んだ。

透が複数股男であることは、もうすでに述べたが、そうなると、彼女に対する気持ちなど、聞くまでもないことが予想された。

僕は、透にウソでも良いから彼女が大好きだったと、言つてほしいとさえ思つた。

そうでないと、彼女が傷つくからだ。

しかし、それは叶わないかも知れない。

なぜなら、透は先月末に彼女が死んだ男とは思えないほど明るさだからだ。

「よしーじゃあ、行こー!」

彼女が、考え込んでいた僕の背中を押した。

僕は、そのまま透のもとへと押されていった。

自分の目の前に突然走りこんで来た僕に、透が驚いた表情を浮かべた。

「信次、何だよ！？朝から随分元気そつだな。」

僕は何と答えて良いのか迷いながら、愛想笑いで返した。

「わざわざ。のんびりしてたら遅刻になっちゃつ。」

透が、足早に前に進んでいった。

それを追いかけるよつこと、彼女が僕にめくばせする。

僕は複雑な思いはあつたものの、急いで透を追いかけた。

「透！」

僕の声に、透は立ち止まつた。

「何だよ？」

明らかに、透から迷惑そつなオーラが感じ取られた。

「あ、あの、さあ。」

田が泳いでいる僕に、透は少しイラついた様子である。

僕の横では、透には見えない彼女が、僕のわき腹を何度も突付いていた。

「歩きながらじゃ、ダメなのかよ？俺、今月遅刻すると、マジやっぱいんだけど。」

「あ、ああ。そつか。じゃあ、歩きながらで。」

そして、僕は話を切り出す。

「お前つてさあ、・・・・先月の終わらへりここまで付き合つてた子がいたらしいな・・・・？」

その僕の言葉に、透の口から予想を上回るほど衝撃的な返答がきた。

「先月？誰のこと？」

僕は沈黙した。

その言葉が持つ意味は、どう解釈すれば良いのだろうかと、真剣に考えてしまった。

「だ、誰つて・・・・？」

「だから、ビの子のことを見つてんだ？」

僕は再び沈黙した。

それは、どの子のことをなにか分からなくなるほど、つまり、一瞬以上だったといふことに間違いなさうなので、僕は横を見るのが恐ろしかった。

彼女の表情を見るのが恐ろしかった。

しかし、透の気持ちを聞きだすことが僕の役目とあっては、ここで中途半端に話を逸らすことができない。

やはり、彼女がこのまま話を続けてほしいと思っているのかを、確かめてみる必要はあった。

それとなく、彼女に確かめようとしたその時、透が勝手に気付いてしまった。

「あれ？ もしかして、里歌のことか？」

「へ？」

僕は、思わず間抜けな声を出してしまった。

「何気に有名だもんなあ。先月の終わり頃に事故で死んだってことで。」

透が彼女のこと覚えていたことは、内心ホッとしたが、それを語る表情に一抹の不安が抱かれた。

「お前に言ってなかつたよなあ？ まあ、普通に可愛かつたけど、…」

「・

それ以上先は言うな！僕が思わず透の口を塞ごうかと思つほど、透の口からサラリと彼女に対する気持ちが出てきてしまう。

「大して好きでもなかつたし、正直事故で死んだつて聞いたときは、ひいたね。」

透の顔は笑つていた。

僕には悪魔に見えた。

彼女の瞳からは無数の雫が流れ落ちていた。

僕は、大きな後悔を感じた。

その後、学校に登校はしたものの、いつの間にか僕の横から消えていた彼女のことが気になつて、勉強どころではなかつた。

僕が彼女を傷つけてしまつたよつて、実に腹立たしかつた。

僕がもつと上手に透から話を聞きだしていれば・・・。

彼女は笑顔で天国に舞い戻れたのに。

昨日、廊下でぶつかった女の子と、僕は再び廊下ですれ違った。

僕は、思わずその子を呼び止める。

「あ、あの！」

女の子は、迷惑そうに僕の方を振り返った。

「もしかして、・・・木村里歌さんの友達・・・？」

その女の子は驚いた表情を浮かべたが、僕の質問に素直に頷いて見せた。

「木村里歌さんって、どんな子だったの・・・？」

「里歌ちゃんを知ってるんですか・・・？」

女の子の表情は一気に暗さを持つ。

「え？まあ。知り合いといえば、知り合いかな。」

「……やつですね……。透さんのお友だちですもんね。」

またか。

僕は正直そう思つた。

僕は学校では、どうやら「透の友達」という意味では有名らしい。「里歌ちゃんは、明るくて素直で、みんなの人気者でした。私も、ずっと一緒にいたかったのに……。こんなことになるなんて……。」

女の子の声が心なしか震えている。

「でもさあ……、キミ、先月透に告つたんでしょ……？」

僕は、複雑な表情で尋ねた。

しかし、女の子の表情は一変した。

「告つてなんかいませんー透さんが、そつと書つてたんですかー!?」

僕は、あまりに激怒する女の子を見て、ただ、うんうんと頷いた。

すると、女の子は大きくため息を吐いた。

「最低!私は、透さんが何股もかけてるって知つて、里歌ちゃんをもつと大事にしてあげて!って言いにいつただけなのに!」

怒り心頭の女の子は、すごい迫力で僕の目の前から歩き去つていつ

た。

透に集まる女の子の全てが、好意をもっているとは限らないようだと、僕は僕なりに何かを学んだような気さえした。

しかし、僕の友達は、なんて罪深い男なんだろうと、少し憤りのようなものも同時に感じていた。

家に帰る途中、例の公園の前を通りかかった。

朝よりも野次馬が増えていたが、木の葉は元気に生い茂っている。

僕は、少しホッとした。

しかし、彼女は一体どこに消えてしまったのか。

それが謎だった。

まさか、あまりのショックに天国に戻ってしまったのか？

気が付けば、僕はもう天使も幽霊も完全に信じてしまっていた。

その方が楽だった。

あれこれ彼女たちを詮索するのは正直、面倒だったし、あの必死そうな様子から、冗談やウソだとは考えづらかった。

もう、今は僕も信者というわけだ。

自分の部屋に戻ると、思いがけない出来事と遭遇した。

「おかえり。遅かつたね。」

そこには、木村里歌の姿があった。

正しくは、姿はないが。

唖然としている僕に、彼女はあっけらかんとした様子で、話しかけてきた。

「マジ、驚いたよ。透の奴、思った通りのバカだつたね。」

彼女はケラケラと笑い出した。

「あ、でも、透は信次君の友達なんだよね？ごめん、ごめん。」

あまりにサッパリとし過ぎて、彼女に、不自然ささえ感じた僕は、

「里歌ちゃん、無理してない・・・？」

笑えるほど真面目な顔で、彼女の顔を覗いた。

すると、

「今、名前呼んでくれたね。」

彼女は、切ない笑顔で僕を見ると、無意識に流れ出した涙を必死に両手で拭つた。

僕は不謹慎にも、そんな彼女を愛しく感じた。

水曜日。

今日も、いつもと変わらない日常が待っていた。

ただ一つ、違うことと言えば、僕が不毛の想いを芽生えさせてしまったことくらいだろうか。

木村里歌は昨夜、僕の前で痛めた心を癒すかのように泣き続け、やがてそのまま眠ってしまった。

幽霊も、一応眠る必要があるらしい。

そして彼女は今朝、元気な様子で、ひどく寝相の悪い僕を、たたき起こしたのだった。

「透には、もう何も話さなくて良いから。残りの時間は、この世界を堪能するために費やすつもりだから、信次君もそれまで手貸してね。」

起きると、彼女がすかさず僕にそう言った。

願つてもない彼女の言葉に、わざと面倒くさそうな表情で頷き、後から密かに笑う、気味の悪い僕がいた。

今日は、登校途中に透とは遭遇せず、僕は正直、内心ホッとしていた。

横にいる彼女に、透を思い出させたくなかったからだ。

少し、ずるくて欲張りな自分を垣間見たようで、僕は自分で自分が恥かしくなった。

授業中、僕の斜め前の席の透は、ずっと携帯をじじつっていた。
どうやら、誰かとメールをしていくようだ。

きっと、女の子とのやりとりなんだ。

僕の横にいる彼女は、それを気に留めていない素振りは見せているが、少なからず気になっているだらうことは、僕にも分かった。

透は、まさか自分の近くに亡くなつた元カノがいるとは、夢にも思

つていらないだろうから、仕方がないにはないのだが、無神経だと言えばそうかもしれない。

そんなことを悶々と考えてこらつちに、授業の終了を知らせるチャイムが鳴った。

結局、授業に身が入らないまま一日が過ぎ去るうとしていた。

そして下校途中、僕は学校の近くで誰かを待っている様子の透を見かけた。

どうせ、女の子と待ち合わせでもしているのだろう。

すると案の上、透のもとへ小走りの女の子がやつて來た。

制服はうちの学校のものだ。

よく見てみると、僕の頭の中に最悪のパターンが瞬時に浮かんだ。

透のもとへ駆け寄ってきたのは、先日僕が木村里歌について話をき

いた女の子で、しかも、その女の子は満遍の笑みで透と会話している。

確かに、先日話したときは、透のことを「最低」と言っていたはずなのに。

あれは、どう見ても、透を最低だと思っているような表情ではない。むしろ、好意を持っているような印象を受ける。

しかし、幸いにも、僕の隣にいる彼女は、一人の存在に気がついていないようだ。

僕は、不自然にならないように、彼女の視界に一人が入らないように配慮して、その場を離れた。

自宅近くの公園の前に来ると、彼女がコラコラと木の方へと進んで行つた。

僕は慌ててそれを追いかける。

「どうしたの？」

その僕の問いに、

「だいぶ、葉っぱ落ちはやったね。」

寂しげな背中の彼女が、呟くように応えた。

「まだまだ、残ってるよ。」

しかし、彼女の言つ通り、木の葉は通常ではあり得ない程のスピードで減つていていた。

「これから、……どうよつかなあ……。」

彼女が、何かいりあるような声で言つた。

僕は、ハツとした。

彼女は、さつき気付いていたんだ。

透が授業中に誰とメールをしていたのか。

そして、透が自分の友だちと親しげに待ち合っていたことを。

本当は、気付いていたんだ。

僕は、そう悟った。

僕は、胸が熱くなるのを感じた。

どうとかして、彼女の笑顔を見たいと思った。

そして、こんなに悲しく切ない様子の彼女を、このまま天国へ行かせるわけにはいかないと考えた。

僕は、はつきりと自分の気持ちを確認することができたような気がした。

「明日、どうか行こうか？」

僕は、木の前で呆然と立ち尽くしている彼女に言った。

「明日？学校でしょ？」

と、彼女は一度、鼻をすすつてから僕に応えた。

「休むよ。だから、どうか行こよ。」

僕のその言葉に彼女は、はつきりと返事はしなかつたが、僕の方を振り返ると、ニイッと口角を上げて小さく頷いた。

第四話 木曜日

木曜日。

今日は学校を休んだ。

彼女のために何かしないでは、いられなかつたからだ。

突然思いつき、突然決まつたことだつたので、当然、無計画にそれは始まつた。

そう、昨日の夜、彼女は僕にイタズラっぽく言つたのだ。

「ねえ、どうか行こうかって、もしかしてデートつてこと?」

彼女との初デートなのに、完璧な無計画といつのが、何とも情けない感じがしたが、この際、仕方がない。

彼女が朝から眠るまで、ずっと笑つていらっしゃるよつとする。

それが、今日の目標なのだから。

僕たちは、特に目的もなく、町を歩いていた。

「子どもの頃にさあ、こここの道を通りて小学校に通りてたんだけど、通るのがすごい嫌だつたんだよねえ。」「

通りかかった道で、僕は小さい頃の記憶を思い出した。

「何で、嫌だつたの？」

「そここの角の大きい家で飼つてた犬が凶暴でさあ、いつあの門を破つて出てくるとも分からなかつて、勝手に怯えてたんだよ。」

その僕の言葉に彼女は笑つた。

「かわいいね。その犬はまだいるの？」

彼女は、角の家の門から中を覗き込んだ。

すると、犬が勢い良く門に突進してきた。

そして、低い唸り声を上げながら、彼女の様子を窺つている。

「あ、危ないよー離れなつて！」

僕は、明らかにビビつてゐるのが見え見えな表情で彼女に言った。

しかし、あまり彼女には近寄れなかつた。

そんな様子の僕を見て、彼女は大爆笑の嵐にのまれていた。

こういう意味で、彼女を笑顔にしたかったわけじゃないが、結果オーライといったところだろうか。

それから、カフェに立ち寄つたり、ショッピングモールで何気なくウインドウショッピングをしたり、時間はあつといつ間に過ぎていつた。

その間に、彼女の表情から笑顔を奪うようなことはなく、僕は目標達成を間近に見ていた。

「そろそろ帰るうか?」

そう僕が彼女に言つた時だつた。

彼女が、突然暗い表情でつづみいたのだ。

僕はハツとした。

「『』、『』めん！何かいけなかつたかな……？」

その慌てた様子の僕に、彼女は応えない。

僕は肩を落とした。

すると、

「信次？」

僕の背後から、聞きなれた声がした。

そちらを振り返ると、僕は彼女が突然暗くなつた理由が分かつた。

「透。」

透の横には、彼女の友だちがいた。

親しげに、・・・いや、まるで恋人のよひ。

「お前、こんな所に独りで來たのか？」

透が、含み笑いを浮かべながら言った。

僕は、愛想笑いで返した。

彼女の友だちは、僕と田が合つと、すぐに田を逸らした。

僕は、心中に沸々と湧き上がる何かを感じた。

彼女は、ただずつとうつむいている。

「あ、そうだ。お前には悪いけどや、俺、この娘と付き合ひに行く
なつたから。」

透は、彼女の友だちの肩を抱き寄せた。

僕は、無意識に拳を握り締めていた。

その、少し震えたような声の僕の言葉に、透は一度聞き返すと、す
ぐに返答してきた。

「彼女は……？　木村里歌は……？」

「死んじました女のことなんか、今さらどうでもいいだろう。俺た
ちは生きてんだからや。」

僕は、自分の表情から笑みを消さないよう努めしつゝも、顔の筋
肉はピクピクと引きつっていた。

「キリは、自分のやつたことが、どうこうことなのか分かってん
のか……？」

僕は、彼女の友だちをにらみ付けた。

すると、

「だつて、……もともと私も透さんのこと良いなあつて思つてた
から……。里歌の手前、遠慮してたんですね……。」

彼女の友だちは、甘ったれた声で答えた。

それが、なおさら僕の怒りをかつた。

二人の言葉を耳にして、僕の傍らにいる彼女の肩が小刻みに震えているのが見えた。

そして、僕の中で、ブツンッと何かがキレた。

「お前ら、最低だよ！自分が良ければそれでいいのかよ！？平気な顔して他人の気持ちを踏みにじって・・・！彼女の純粋な気持ちを踏みにじって・・・！俺だったら、絶対そんなことはしない・・・！あんな良い娘を傷つけたりしない・・・！」

そんな僕を見て、

「信次、何怒つてんだよ？そんなに熱くなるなよ。」

透が、ニヤついて言った。

「へラへラしてんじゃねえよ！何も分かってねえんだな！お前どなんか、話しても無駄つてことが分かったよ。」

僕は、物凄い剣幕で怒鳴り散らすと、一人の前から立ち去った。

しかし、怒りのままにその場を立ち去つて、僕はハッと我に返つた。あの一人の目の前に、彼女を置き去りにしてしまったことに気がついたのだ。

僕は慌てた。

しかし、

「信次君。」

彼女は、僕の後ろをついて来ていたようだつた。

僕は、ホツと胸を撫で下ろした。

彼女の表情は落ち込んでいた。

今日の目標が、じじでついに達成されなくなつてしまつた。

僕は、自分の無力を加減に、正直ガツカリしていた。

「ごめんね・・・。」

僕の口からは、その言葉が真っ先に出てきた。

しかし、彼女は僕の手を両手に持つと、

「信次君、・・・ありがと。」

静かな声でそう言った。

その表情は、悲しくも優しい笑顔だった。

金曜日。

昨日は、最低な1日だった。

結局、僕はどうしたら彼女に幸せな時間を過ごさせてあざられるのかが、全く分からなくなってきた。

やるけど、どうせ裏田に出ていくからだ。

きっと、彼女は僕にウンザリしているに違いない。

あんな、勢いで透を怒鳴りつけた僕だったが、何様のつもりなんだ
と、後から冷静になつて考えてみると、自分で自分に思つた。

彼女と透が、彼女の生前どのよつに過ぎしていたかなんて知らない
くせに、一丁前に偉そなことを口走つてしまつた僕。

なんて、ウザイ奴なんだろう。

僕は昨夜ベッドの中で独り、悶々とそんなことを考えていた。

昨日の帰りの道中、彼女は何ら傷ついた様子もないような素振りで
僕に話しかけてきていたが、内心はどれほど傷ついているのだろう
と考えると、僕はとても笑顔にはなれなかつた。

そして、今日は始まつた。

近所の公園の近くを通りかかると、例の木がまだ元気に青い葉をつけているのが見えた。

その近くを何気なく見回すと、ワンピースの女の子が田に付いた。

「あ、天使さんだ。」

彼女は、嬉しそうにワンピースの女の子の方へと駆け寄つて行った。

僕も、それを追いかけるように、女の子のもとへと駆け寄つた。

「おはよっござります。里歌さん、気持ちをお話しきつとまはできましたか？」

ワンピースの女の子の、痛い質問が飛んだ。

しかし、彼女は照れくさうに、

「それは、もう良いんです。私もともと眼中に入れられてなかつたみたいだから。」

少し笑いながら答えた。

ワンピースの女の子は、複雑な表情を浮かべた。

そして、

「里歌さん、残された時間は、もうわずかです。月曜日の朝には、ここを離れなければなりません。お分かりですよね・・・？」

ワンピースの女の子の表情に、心配の色が浮かんだ。

僕も、ワンピースの女の子のその言葉には、ハツとさせられた。

そう、彼女とは遅かれ早かれ離れなければならぬのだ。

僕の表情は、一気に強張った。

彼女は、ワンピースの女の子の言葉には、

「分かってます。」

と、ただ一言で答えた。

学校に登校した僕だが、またもや勉強に身の入らない状況にあつた。

彼女とは、離れなければならない。

それは分かっていたことだったが、改めて言われると、ゾッとする

ような嫌な感じがする。

僕は、このままで良いのか？

僕は、彼女に対してもこのままで良いのか？

僕は、・・・。

結局、答えの出ない質問を自分に投げ掛けているうちに、下校の時
聞かぎてしまった。

彼女は、いつも学校について来て、僕の傍らにいつもいる。

時々、分からぬ問題を教えてくれたりして、頼りになる存在で、
笑顔が可愛くて、強引なところもあるけど、人に優しくて。

僕は、そんな彼女が好きみたいだ。

いや、それは知つてたけど、こんなに深いとは思つてなかつた。

きつと僕は、この気持ちを抱いたまま彼女と離れることになつたら、
後悔するような気はしていた。

それを伝えた瞬間に、彼女と過ごす時間が終わつてしまつ可憳性だ
つてある。

でも、・・・。

そして、下校途中、近所の公園の前に来たとき、僕は思い切って彼女に気持ちを伝えようと、彼女に声をかけた。

「あ、あ、あの、ああ・・・。」

何とも、不自然な呼びかけだった。

すると、彼女は僕の言葉を聞く前に、何かを言つ。

「・・・・・・。」

しかし丁度、風の音で聞き消されてしまい、僕には聞こえなかつた。

「え？ごめん！聞こえなかつた。」

僕が、聞き返すと、彼女は少し暗く、少し悲しげで、少し笑い、少しへにかみ、少し照れた、複雑な表情で、僕に言つ。

「ごめんなね。」

僕は、え？と再び聞き返した。

何故、彼女が僕に謝つているのが、分からなかつたからだ。

すると、彼女は僕の目をみつめて、言ひ。

「「めんね。私、・・・・・信次君が好きです・・・・・。」

僕は、啞然とした表情で、その場に張り付いたよつて立ち尽くしてしまった。

第六話 土曜日

土曜日。

今日は学校が休みだったのだが、僕は朝早くに家を出た。

どうも、部屋にいるのが気まずかったのだ。

昨日、僕は彼女から思いがけない言葉を聞かされた。

「好き」という言葉だ。

それも、それは透に対してもじゃない。

僕に対しての「好き」だった。

僕は混乱した。

僕は朝早くから一人で駅前のファーストフード店で、深刻な表情を浮かべて小さくうなつっていた。

窓際の席に座っていた僕は、店の外を行き交う人たちを無意識に見つめていた。

すると、僕はその中に透の姿を目にした。

と、同時に、透も僕の存在に気付いて、こちらを見た。

そして、透は何を思ったのか、僕のいるファーストフード店に入っ

てきた。

僕は、明らかに動搖した。

「昨日、僕は透を怒鳴りつけたばかりだからだ。

まさか、透は僕を殴りにでも来たのではないかと思いつつ、僕の目の前に現れた透を見た瞬間、身構えた。

しかし、

「よお。こんな所で何してんだ？」

透は、いたつて普段の様子と変わらなかつた。

僕は少し安心した。

少なくとも、透は僕を殴りに来たのではないことは明らかだつた。

「ちょっとな……。」

僕は、複雑な表情でジュースをすすつた。

「この間はどうしたんだ？ やけに苛立つてたみたいだな？」

「え……？」

透は、どうやら一昨日僕が怒鳴ったのは、ただ単に機嫌が悪かつただけなのだと思っていたらしい。

「でも、水臭いよなあ、お前も。」

透は、僕に向かい合つて席に着いた。

「水臭い？」

僕は透の意味不明な言葉に聞き返した。

「だつてお前、里歌と付き合つてたんだるう。」

その透の言葉は衝撃的だった。

僕が木村里歌と付き合つてた？

「だ、誰がそんなこと言つたんだよ！？」

僕のその勢いの良い質問に、

「誰も言つてないけど。ここ最近お前があんまり里歌、里歌つてうるさいからさあ。そんなんじゃないかと思つただけだけど。違うのか？」

とぼけた表情の透が答えた。

僕は、ハアッと大きなため息を吐いた。

「そんなわけないだろう・・・。彼女がお前と付き合つてたことだつて知らなかつたし、第一、木村里歌を知つたのは、つい先日なんだよ・・・。」

「でも、あいつ死ぬ前に言つてたぜ。好きな人がいるって。」

「だから、それはお前だろ？？」

僕はため息混じりに透の言葉に応えた。

すると、

「そうじゃなくて、里歌が俺をふつた時にさう言つてたんだよ。」

透が微妙な笑顔で言つた。

「ふつた？ 彼女がお前を？」

透は頷いた。

「付き合つてたんだろ？？」

その僕の言葉に、透は再び頷いた。

「少しの間だけだけどな。でも、ある日突然、里歌のほうから別れようつて言つてきたんだよ。実は、他にずっと好きな人がいたんだつて。」

僕は、その透の言葉を聞いて、ただただ驚いていた。

「で、それは誰だつてきいたら、俺の友だちだつていうからさ。俺はてつきりお前のことだと思つてたけど。」

僕の頭の中は混乱しきって、透の言葉に返答する言葉が見つけられない状況にあった。

その後の透との会話は、ほとんど覚えていなかつた。

僕は呆然と、家に帰り、自分の部屋へと舞い戻つた。

そこには、少し暗い表情の木村里歌が、まるで僕を待つていたかのよつに呆然と立つていた。

僕は何も言わずにベッドに潜り込んだ。

すると、彼女はすかさず、

「怒つてゐるの・・・?」

僕の肩に触れて言つた。

僕は何も応えないといた。

「ねえ、信次君・・・？」

彼女の暗い声が聞こえた。

「怒ってるんだ・・・。私が・・・好きだつて言ったから・・・？」

「違うよ。」

僕は無愛想な声で答えた。

「じゃあ、何で・・・？」

その彼女の言葉の後、部屋の中に重い沈黙が立ちこめた。

僕は沈黙を断ち切るよつこ、ベッドから起き上がった。

「本当のことと・・・？」

僕は彼女の目を見た。

彼女は首をかしげた。

「本当は、透の他に好きな奴がいたんだひつ？」

その僕の質問には、彼女は何も返答してこなかつた。

僕は再びベッドにもぐつた。

「キミは、透のことなんて、特に好きでもなかつたのか・・・？キミは、俺をからかつてたのか・・・？本当はもう、その好きな人に気持ちを伝えて、やることがないから、バカみたいに戸惑つてる俺を見て笑つてたんじやないのか・・・？・・・最低だな・・・」

僕は、そう言い放つた次の瞬間には、言つたことをひどく後悔した。しかし、言つて過ぎたことを謝るつづべジドから起き上がりがつた時には、すでにそこには彼女の姿はなかつた。

すぐに僕は近所を探し回つた。

しかし、彼女の姿を確認することはできず、夜が更けていった。

そして結局その日、彼女は部屋へ帰つてこなかつた。

田羅田。

僕は、誰かに起された。

それは木村里歌ではなく、ワンピースの女の子だった。

僕は、あからさまにガッカリした。

「お話しがあります。」

ワンピースの女の子は、これまでにないほど真剣な表情で言った。

僕は、ベッドから起き上がると、ワンピースの女の子の話を聞いた。

「里歌さん、昨日の夜会いました。泣きじやくついて、事情を聞くのに苦労しましたが……。」

僕はとつさに、

「彼女にひじこ事を言っちゃって……。俺が悪いんだ……。」

と書いて、うつむいた。

すると、

「彼女もさう言つてました。」

ワンピースの女の子の言葉に、僕は顔を上げた。

「自分が悪いんだって。・・・、だから、信次さんが、笑ってくれない、と・・・。」

しかし、僕はそのワンピースの女の子の言葉には、再びうつむいてしまった。

「確かに、彼女は悪いかもしません・・・。でも、それも彼女なりの事情もありましたし、考え方や気持ちもあってのことですから・・・。」

ワンピースの女の子は、真剣な表情で話を続けた。

「彼女は、叶えられる願いがあるのなら、叶えたいことがあると言つて、次のように言いました。「一度も話したことのない人だけど、遠くもなく近くもない場所からいつも見ていた人がいた。好きな気持ちも伝えられないままあの世に召されることになつてしまつた。だから、その人と少しの時間でいいから共有したい」と。」

僕は、ゆっくりと顔を上げた。

「その願いを叶えるべく、私は里歌さんと一人でやつて來ました。しかし、彼女の願いには、大きな壁がありました。彼女が面識のない人に私がコンタクトしても、彼女ことを知らないのでは、彼女と共に過ごしてくれるとは思えなかつたのです・・・。だから、ウソをつきました・・・。」

「ウソ・・・?」

僕は聞き返した。

「はい・・・。里歌さんの願いを叶える手伝いをしてほしいと、その人に・・・。」

僕は息が止まるほどの驚きに襲われた。

ワンピースの女の子が言っていることが、にわかには信じられない気持ちもあった。

「ちょ、ちょっと待ってくれよー。じゃあ、木村里歌が好きな人っていつのは・・・」

「信次さん、あなたです。」

僕はひどい胸騒ぎの中、自分の手が震えていることに気がついた。

それくらい思いがけない、驚愕の真実を、僕は受け止めきれていなかつたのだろう。

そして、ワンピースの女の子は詳細を聞かせてくれた。

面識のない僕と時間を共有する手段として、生前の一番最後に付き合つた透にお礼を言いたいという依頼を持ちかけることにした。

しかも、透は僕の友だちとこうともあって、依頼を受け入れてくれ

れる可能性は大いにあると確信したのだ。

そして、僕はその依頼を引き受け、彼女と時間を共有するようになつた。

しかし、共に過ごすにつれて、彼女の中で欲が生まれた。

僕に気持ちを伝えるということだ。

しかし、彼女はそれを正しいことだとは思つていなかつた。
すでに靈魂となつてゐる自分に、気持ちを伝えられても、僕が困る
だけだと思つたからだ。

だから、彼女は僕に謝つたのだと、僕は今頃になつて気がついた。
しかし、ワンピースの女の子の話が真実だとしても、僕の中には疑
問もあつた。

僕とは面識のないはずの彼女が、一体いつどこで僕の存在に気がつ
いたのだろうか？

現に、僕は透と彼女が少しの間でも付き合つていても関わらず、
彼女のことを全く知らなかつた。

・・・ 一体何故・・・ ?

そして、これは疑問ではないが、僕は彼女に謝らなければならぬ
し、伝えなければならない言葉もあつた。

何が何でも、もう一度彼女に会つ必要があった。

しかし、彼女に残された時間は、もう少しない。

明日の朝には完全に天に召されていくのだ。

僕は焦りと共に、胸の中に熱い何かを感じていた。

僕は無意識に部屋を飛び出して、走っていた。

月曜日。

ついに朝が来てしまった。

ずっと彼女の行方を捜していた。

しかし、一向に見つからない。僕の気持ちの中で、諦めの色が滲み出ていた時、僕は近所の公園にたどり着いた。

木についていた青い葉は、残すところ数えるほどしかないことに気がついた。

僕は、一気に脱力感に襲われ、近くのベンチに座り込んだ。

気付けば、そこはワンピースの女の子と彼女に初めて出会った場所だった。

僕は鼻水をすすつた。

木の葉が一枚落ちた。

その葉が風に舞う様子を見ていた僕に、誰かが声をかけてきた。

それは聞き覚えのある声だった。

いや、むしろ、捜し求めていた声と言つたほうが正しいかもしだい。

「信次君・・・？」

彼女は、暗い表情で僕を一直線に見ていた。

僕は、あまりに突然彼女が現れたことに驚き、声を詰まらせた。

そして、

「『ごめん！』

「『ごめんね！』

「え？」

僕と彼女の声は、上手にハモった。

彼女は、驚いた様子で僕の顔を見た。

「『ごめん・・・。昨日は言こすぎた・・・。・・・じゃなくて、・・・誤解してた・・・。あんな傷つけるようなこと言って、最低なのは、俺のほうだ・・・。』

「信次君・・・？」

僕は座っていたベンチから立ち上がった。

「昨日、あのワンピースの女の子から聞いたよ、全部・・・。でも、何で・・・？」

そう僕が言った時、僕の視界にワンピースの女の子の姿が入った。

僕は間もなく別れを悟った。

「…………毎朝、電車の中で信次君を見てたの……。高校に入学してからずっと、いいなって……。でもある日、透君から付き合おうって言われて……。透君とは、その前に何度か話したこともあったし、優しい人だと思ってたから、断る言葉が見つからなくて……。そしたら、信次君が透君の友だちだったから、びっくりした。」

彼女が、少しばかんだ笑顔を見せた。

「透君のことは、確かにすごい好きだったわけじゃなかつた……。でも、一緒にいて楽しかつた……。でも、透君の近くで時々見かける信次君のことを、気付いたら目で追つて……。私、こんなじや、透君に失礼だつて思ったの……。だから、別れようつて……。」

彼女は、ややうつむき加減で話していた。

「その後、私、信次君に気持ちを伝えようつて、決意したの……。でも、そのすぐ後に事故にあって……。」

ワンピースの女の子が、彼女の背後に近づいてきた。

「里歌さん、…………そろそろ時間です…………。」

彼女は、ハツとした表情で後ろを振り返った。

僕は焦った。

彼女が行ってしまう。

そう思つたからだ。

「俺は・・・、キミが好きだ！」

その、少し震えた声の僕の言葉を聞いた彼女は、勢い良く僕の方を振り返つた。

「本当は、伝えるべきか迷つた・・・。キミとは、必ず離れなればならないことを分かつてたから・・・。」

僕の方を真っ直ぐに見ている彼女の瞳が潤んでいた。

「でも・・・、・・・・・でも、好きなんだ・・・。」

彼女は、僕の方へ駆け寄つてきた。

「ありがとう・・・・・、私、信次君に会えて良かつた・・・。」

「

彼女の声は震えていた。

しかし、無情にも木の葉の最後の一枚が風に乗つてゆっくりと降下し始めた。

すると、突風のような激しい風が、彼女と僕を遮るように吹き荒れ始めた。

僕は、とつと彼女の方に手を差し伸べた。

すると、彼女はしっかりと僕の手を握った。

「素敵な時間をありがとうございました！」

僕は、風に負けないほどの声を張り上げて叫んだ。

すると、彼女の微笑みが見えたような気がした。

突風が去ったその瞬間には、もつすでに、その場に彼女とワンピースの女の子の姿はなかつた。

しかし、この手に残る彼女の手の感触は、まだ鮮明だった。

それは、僕がまだ高校生の頃の話で、もちろん、それ以来木村里歌の姿は見ていない。

僕はそれからしばらくの間は、大きな悲しみに押しつぶされそうな気持ちで過ごしていたが、今はそうは感じていない。

むしろ、僕は彼女に感謝しているのだ。

誰かを本当に愛する気持ちを教えてくれた、僕の掛け替えのない初恋の彼女に。

第八話 月曜日（後書き）

作者のJOHNEYです。いつも、完結させることができました。ここまでお付き合い頂いた方に、感謝の一言です。至らない点があり過ぎて、申し訳ないです。。。今後も、どうぞよろしくお願ひ致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0940b/>

時を刻む木

2010年12月10日00時17分発行